白鳥姫　お前の腕に抱かれてね――。

王子　神の擁護があるのだよ。

白鳥姫　末の末までも渝りつこなしよ。

王子　誰か二人を離すことができるかい。

白鳥姫　誰にもできやしなくつてよ。

王子　お前はわたしの花嫁かい。

白鳥姫　お前はわたしの婿様なの。

王子　夢の國のことなんだよ。ここのことぢやあないんだよ。

白鳥姫　あたしたちはどこにゐるの。

王子　やつぱりここにゐるのだよ。

白鳥姫　ここはあたしたちの上に、雲が掩ひかぶさるところなのよ。海が荒れるところなのよ。太陽の出る前に、夜毎々々地が草の上に泣くところなのよ。鷹が鳩を裂くところなのよ。燕が蝶を殺すところなのよ。髪の毛が白くなつて頰がこけるところなのよ。眼が窪んで、手が萎びてしまふところなのよ。ここの下界はね。

王子　逃げてしまはうよ。

白鳥姫　逃げてしまはうよ。

庭番、不意に卓の背後に現れる。綠色の服、帽子、前掛、半股引、腰帶に大鋏と小刀、小さい袋を持つ。彼はそこらを歩いて、種を蒔き散らしてゐる。

王子　お前は何だ。

庭番　へい、へい、手前は蒔いてをります。

王子　何を蒔いてゐるのだ。

庭番　種を蒔いてをります。

王子　何の種子を蒔いてゐるのだ。

庭番　一度叩かれ、二度叩かれ。あちらから一つとり、こちらから二つとり。嫁入り道具の荷づくり濟めば、和合の調子が狂つてしまふ。不和に調子の狂つた時に手前は蒔きます。調子が揃つた時にあなたは收穫れなさるが好い。一と一とは一つになるが、一と一とは三にもなる。一と一とは二つになるが、二つが三つになりまする。これがお解りなさりますか。

王子　顏を土へ向けて、天に背を見せてゐる蚯蚓か地蟲のやうなお前が、何を私に敎へるといふのだい。

庭番　あなたこそ蛭蜘か地蟲でございます。あなたは土に背をお向けなさる、土はあなたに背を向けるでございませう。これでお暇いたします。〔卓の背後に消えうせる〕

白鳥姫　あいつは何だらう。誰だらう。

王子　あいつは綠色の庭番だよ。

白鳥姫　綠色。いゝえ、青かつたわ。

王子　綠色だつたぢやないか。

白鳥姫　うそよ。なぜさうぢやないものをさうだつて言ふの。

王子　たゞ、さうだからさうだと言つたんぢやないか。

白鳥姫　えゝもう、この人はほんたうのことを言はないんだもの。

王子　誰の聲が聞えたのだらう。白鳥姫の聲ではないんだよ。

白鳥姫　わたしの見てゐる人は誰だらう。——わたしの王子ではないんだよ。その人は名は罔象女の不思議な音樂のやうに、綠の波を泳ぐ人魚の歌のやうに、あたしを惹きつけたけれど——。意地の悪い眼をして——灰色の髪の毛の他所の人、お前は誰なの。

王子　塔の中の半夜の間に、白鳥姫の見えない悲しさに、わたしの髪の毛が灰色になつたといふことを、お前はたつた今氣がついたのかい。姫はもうここにはゐないのだよ。

白鳥姫　だつて白鳥姫はここにゐるんだよ。

王子　うそだよ。ここに黑い女の子が立つてゐるんだよ。その子の顏は黑いんだよ。

白鳥姫　お前、わたしが黑い着物を着てゐることを知つてゐなかつたのかい。——そんならお前はあたしを愛してゐないのよ。

王子　嗔嘩腰で、憎々しい顏をしてここに立つてゐる女を愛せと言ふのかい、いやなこつた。

白鳥姫　そんならお前は僞言者よ。

王子　違ふよ、ここに立つてゐるのはよその人だよ。たつた今、お前はわたしの口へ蕁麻を投げつけたよ。

白鳥姫　そら、お前の唇は獨活草の匂ひがする。——おゝいやだ。

王子　わたしは若い王様に對して、不忠の罪にあたつたのだよ。

白鳥姫　お前の若い王様をお待ちまをして居ればよかつたんだのに——。

王子　お待ち。王様はあちらからおいであそばしたよ。

白鳥姫　わたし、待つてゐなくつても好いでせう。こちらからお迎へに行つてよ。

王子　そんならわたしは殘つてゐる。

白鳥姫　〔舞臺の背後へ行く〕　これが戀といふものかねえ。

王子　〔呆然として〕白鳥姫はどこにゐるのだらう。どこにゐるのだらう。一番美しい、一番いい、一番好きな白鳥姫はどこへ行つたのだらう。

白鳥姫　さがしてごらんよ。

王子　ここいらにはゐないんだもの。

白鳥姫　どつかほかのとこにゐるのだよ。〔去る〕

王子一人、卓の側に坐る。手にて顔を掩ふて泣く。一陣の風室内に吹きいる。幕と垂帳と靡き、竪琴の絃顫へる。王子立ち上がりて寢室へ行き、白鳥姫の横顔の跡を殘した枕を見て、深い物思ひに沈む。枕を取つて接吻する。

何となく物騒がしくなる。王子、卓の側に坐る。

部屋の戸、不意に開く。三人の侍女等、黒い顔になつて現れる。繼母も黒い顔にて、背後から入りくる。

繼母　〔物柔かに〕お早うございます。ゆうべはよく睡れましたかい。

王子　白鳥姫はどこへ行つたのです。

繼母　あの子は若い王様と、結婚の旅に行きましたよ。お前さんはそのことを考へてはゐなかつたのかい。

王子　わたしの考へてゐることは、たつた一つしかないんですもの……

繼母　若い白鳥姫のことをですか。

王子　あの人はわたしには若すぎますかしら。

繼母　灰色の髪の毛は、分別のある女子と一緒になる方が得なのだよ。——わたしのとこに分別の好い娘があるよ。

王子　わたしが灰色の髪の毛だつて。

繼母　この人は知らないんだよ。ほんたうにしらないんだよ。ジグネや、エルザや、トゥファや。この胡麻鹽頭の若い色男を笑つておやりよ。

侍女等笑ひくづれる。繼母、掌を合せて笑ふ。

王子　白鳥姫はどこへ行つたのだらう。

繼母　あの子の足痕についていつたら好いだらうよ。ここにも一つある。〔書かれた羊皮紙を手渡す〕

王子　これはあの人が書いてくれたの。

繼母　お前さん、あの子の手をお知りかい。——どんなことが書いてありますの。

王子　わたしを憎んで他の人を愛するんだつて、わたしの感情を弄んだんだつて、わたしの接吻を吐出して、わたしの心を芥溜へ投げすてるのだつて——。もうわたし死んでしまひたいよ。もう死んでしまつたんだよ。

綱母　騎士は女なんぞにからかはれたつて死ぬものではありませんよ。ほかのものに見かへて、男を見せておやりなさるが好い。

王子　ほかのもの。何かほかのものがあるつて言ふの。

綱母　少くとも二人あるよ。それからわたしのマグダレーナは金を七順持つてゐるんだよ。

王子　七順。

綱母　もつと澤山あるんだよ。

間。

王子　白鳥姫はどこへ行つたのだらう。

綱母　それから、マグダレーナには色々な技があるんだよ……

王子　その人、魔法が使へるの。

綱母　お前さんなんぞは、すぐ魔法にかけてしまふんだよ。

王子　〔羊皮紙に書いてあることを考へる〕これは白鳥姫が書いたのかしら。

綱母　マグダレーナには、そんなに書けやしなかつたよ。

王子　マグダレーナは好い人なの。

綱母　神様のやうな女なのだよ。神聖なるべき情を弄ぶことなぞはないし、少しばかりの粗相は咎めやしないし、親しむものには眞實なんだよ。

王子　そんなら美しい人なのかい。

綱母　美しくはないんだよ。

王子　そんなら好い人ぢやないんだ。——もつとその人のことを話しておくれ。

綱母　どらん、その人を。

王子　どこにゐるのさ。

綱母　ここにゐるんだよ。

王子　白鳥姫がこれを書いたのかしら。

綱母　マグダレーナなら、もつと心をこめて書いたらうに。

王子　その人ならどんな風に書くだらう。

綱母　さあ……

王子　あの言葉を言つておくれ。言へるなら『愛』と言つておくれ。

綱母　『貝』

王子　をばさんにはその音が出ないんだな。

綱母　『蝿』

王子　それでも遂ふよ。

繼母　マグダレーナなら言へるんだよ。あの人ここへ來ても構はないかい。

王子　來ても好いよ。

繼母　〔立つて侍女に言ふ〕　王子さんの目をお縛り。さうすると、七つの王國の中に比べるものもないやうな婦人が、その方のお妃になるんだよ。

〔ツケネ進み出て、王子に眼隱しする。

繼母　〔手を拍つ〕さあ、まだあの人は來ないのかい。……

孔雀、嘴を叩く。鳩、鳴く。

繼母　わたしの術が利かなくなつたのかね。どうしたと言ふんだらう。——花嫁さんはどこにゐるのです。

籠に入れた白と紅との薔薇の花を運んで、四人の侍女背後から入りくる。上から音樂が聞える。侍女等寢臺のほとりを通つて薔薇を撒く。兜の面頰を閉ぢた二人の騎士入りくる。騎士、王子の手を取つて後方に導く。そこにて二人の女に扈從された璽のマグダレーナに出逢ふ。花嫁は厚い面帕をつけてゐる。繼母は手振にて、新婚の二人を殘して去らせる。次に繼母も、戸を閉ぢ、幕を引いて去る。

王子　そこにゐるのはわたしの花嫁かい。

璽のマグダレーナ　お前のお嫁つて誰のことなの。

王子　その人の名は忘れてしまつたよ。お前の殿樣つていふのは誰なの。

璽のマグダレーナ　その人の名は言はれないのよ。

王子　言へるなら言つてごらんよ。

璽のマグダレーナ　言へるけれど、言ふのはいやだわ。

王子　言へるのなら言つてごらんよ。

璽のマグダレーナ　始めにお前の方から言つてごらんよ。

王子　金が七噸、佝僂、意地惡、毛の生えた脣。わたしのことは何と言はれるだらう。お前言へるなら言つてごらん。

璽のマグダレーナ　灰色の髮の王子よ。

王子　その通りだよ。

璽のマグダレーナ、面帕を取り去る。

白鳥姫　〔薔薇の冠を戴き、白の上着にてそこに立つ〕さあ、あたしは誰だと思つて。

王子　お前は薔薇の花だよ。

白鳥姫　お前は菫の花だよ。

王子　〔眼かくしをとる〕お前は白鳥姫ぢやないか。

白鳥姫　さうしてお前も――お前も――

王子　しいッ。

白鳥姫　お前はあたしのものよ。

王子　お前はわたしの接吻から逃げて行つたぢやないか。

白鳥姫　さうしてまた歸つてきたのよ。あなたを愛してゐるからよ。

王子　それから、お前は憎らしいことを書いたぢやないか。

白鳥姫　お前を愛してゐるから、それも消してしまつてよ。

王子　それから、お前は僞言者だと言つたぢやないか。

白鳥姫　お前さへ正直なら、何だつて好いぢやないか。あたし、お前を愛してよ。

王子　それから、お前は若い王様のところへ行つたのだらう。

白鳥姫　だけど、またお前のところへ戻つて來たのよ。お前はあたしの戀人だからよ。

王子　お前はまたわたしを咎めるんだらう。

白鳥姫　いゝえ、そんなことは忘れてしまつてよ。お前はあたしの戀人ですもの。

王子　戀人なら、お前はわたしのお嫁なんだね。

白鳥姫　さうなのよ。

王子　そんなら、神様が二人の契をお護りくださるよ。

白鳥姫　夢の國へ行きませうね。

王子　わたしの腕へおつかまりよ。〔姫を寢臺へ導く。姫と自分の間に劍をおく。黃金色の雲、薔薇のやうに紅くなる。薔薇の樹鳴り戰ぐ。竪琴・戀の譜を彈く〕　おやすみよ、わたしの女王。

白鳥姫　おやすみなさいまし。――お前の胸の動悸が聞えてよ。お前の呼吸が、海の波のやうに聞えてよ。競馬の足音のやうに、鷲の翼のやうに聞えてよ。――あたしを抱いてちやうだいよ。

王子　いいかい。そら、二人翅を擴げて飛んで行くんだよ……

繼母　〔炬火を携へた侍女等を伴れて登場。四人とも髮は灰色である〕　公爵が歸つてくる前に、わたしの爲事がうまくいつたか見ておかう。白鳥姫が塔の中にゐる間に、わたしの娘のマグダレーナは王子と契つてしまつた。〔寢室に近よる〕　二人は抱き合つて睡つてゐる。お前たちは證人になるんだよ。〔侍女等寢室に寄る〕　おや何といふことだ。お前たちの髮はみんな灰色だよ。

ジグネ　奥さまのもさやうにございます。

繼母　見させておくれ。〔エルザ、鏡を持つ〕　恐しいやうだねえ。きつと王子の額髮は、元のやうに

黒くなつてゐるのだよ。あかりをお見せ。〔侍女等、睡れる人を照し出す〕間違ひなしだよ。——どらん、うまく行つたんだよ。——けれどもこの剣は。まあ、誰がこんなところへ剣なんぞ置いたのだらう。〔剣を取らうと試みたが、王子は睡りながらも剣を堅く押へてゐる〕

ジグネ 奥さま。ここが何だか心配になつてきゐりました。

繃母 どうしたと言ふんだい。

ジグネ これはマグダレーナさまではございませんか。

繃母 誰だと言ふのだい。わたしの目はどうかしたのかしら。

ジグネ これは白鳥姫さまでございます。

繃母 なに白鳥姫。悪魔の蠱惑か、それとも爲てはならないことを爲てしまつたのか。

王子身動きして、唇を白鳥姫に寄せる。

繃母 〔美しい光景に打たれる〕 わたしはこんな美しいものを見たことがあらうか。——風に觸れ逢ふ二つの薔薇の花か、空から落ちる二つの星か。いゝえ、もつと、もつと美しいのだ。若さと、美しさと、潔さと、愛と。——そして思ひ出がある、わたしがおとうさまのお屋敷にゐた頃の甘い思ひ出がある。あの人がわたしを戀してゐた。わたしはその青年と結婚しずに別れてしまつた。が……わたしはその青年にどんなことを言つたらう。

ジグネ 奥さまは昔の戀物語をしていらつしやる。

繃母 それからわたしは、力をこめた言葉を眞直に言つた。變するものよ。あの人が戦争に行く前に、わたしを『愛する者よ』とよんだ。——〔思ひに沈む〕 あの人はもう戻つては來なかつた。——それからわたしは、とても我慢のできない人のところへ無理に遣られてしまつた。もうわたしの生涯は終つてしまつて、自分の得られなかつた歡樂を羨まなければならないのだ。わたしは——他人の歡樂を羨まなければならないのだ。他人の戀を——、やつぱりそれは戀なのだ。歡樂なのだ。けれどもわたしのマグダレーナはどうしたらう。あの子も嬉しい思ひをしたからうに。全智全能の戀よ。不死不滅の神様よ。あなたはわたしの獅子のやうな心を弱めておしまひなすつた。わたしの力はどうした。わたしの憎みはどうした。〔坐つて睡つてゐる人を見る〕 わたしの復讐はどうした。わたしはあの歌を思ひ出す。二人が最後に別れる晩、あの人がわたしの若さをうたつた戀歌を思ひ出す……。〔夢から覺めたやうに起き上がり、忽然として叫ぶ〕 誰かゐないか。——これ用人、城番、牢番はゐないか。〔病床から劍を採つて、背後に投げ捨てる〕 皆出て來ないか。

物音。家來等、前の如く登場。

繃母 これをごらん。王子が、若い王様の家來が、主君の奥方と密通をしたのだよ。不義の證據を

お擧げ。王様を欺いた不忠者はぎりぎりに縛りあげて、主君の前へ引据ゑておやり。この淫婦を釘の出てゐる桶の中へ投りこんでおやり。

王子、白鳥姫、目覺める。

繼母 牢番、厩番、この王子を押へてしまへ。

牢番、厩番、王子を押へる。

王子 劍はどこへ行つた。無禮者を防ぐ役には立たないのか。無罪の證據を見せてやるのに。

繼母 誰が無罪なのだ。

王子 わたしの花嫁が無罪なのだ。

繼母 この淫婦が無罪だつていふのか。證據をお見せ。

白鳥姫 おかあさま、おかあさま。

白鳥、外景を飛ぶ。

繼母 鋏をお貸し、この淫婦の前髪を截つてやるから。

ジグネ、鋏を差出す。

繼母 〔白鳥姫の髪を掴んで截らうとする。鋏は硬直して刃尖が合はない〕 そら、お前の美しい戀人の毛を切つてやるぞ。〔繼母恐怖におそはれる。家來達も侍女達もおそはれる〕

繼母 魔物が憑いたのかしら。なぜお前は顫へてゐるのだ……。

ジグネ 奥さま。犬が吠えてをります。馬が嘶いてをります。誰か來る前ぶれでございます。

繼母 皆、跳橋へおいで。みんなだよ。墻壁へ行つておくれ。早く、早く。火だよ。水だよ。劍だ。鉞だ。

王子と白鳥姫と、たゞ二人殘る。

第三幕

三人の侍女が部屋の中で立ち働いてゐる。一、偽りのあるジグネは錫の間にゐる。二、小さいエルザは衣(ゐ)の間にゐる。三、不器量ながらまことのあるトッファは果實の間にゐる。

庶番 〔出てくる〕ジグネや、娘や、加勢してくれ。

ジグネ まああんな大さわぎをして誰がやつて來たの。公爵様が、殿様が、戰からおかへりにでもなつたのかい。

庶番 いや、公爵様ではない。白鳥姫さまの婿君の若い王様からお使節が來たのだ。それにおびただしい鎧武者の供揃さ。情ない目にあふものだ、戰爭になるのだ……せつかくの御苑も燒き拂はれてしまふだらう。

ジグネ お前のまいた種が芽をふいたのだ、不和の種が。自分で蒔いたものを自分で刈るがいいさ……。

庶番 不忠者のジグネめ、お前があの救ひの角笛を奥方にわたしてしまつたのは、われ〳〵を裏切るしわざであつたぞ。

ジグネ 忠義な召使はお家の仇には不忠者さね……

庶番 これでもし公爵さまがおかへりにならなければ、お城は亡ぼされてしまふ。でも公爵さまが今頃どうしておかへりにならう。

ジグネ その時になれば、その時の思案さ。さし當りお客さまの御食事だ。わたしは錫の器をみがく役、エルザさんはお召物の手入れ役、トッファさんは果物を乾かす役……すると若い王さまはおいでにならないの。

庶番 お使節と供揃だけ……

ジグネ 王さまはどこにいらつしやるのだらう。

庶番 それを知るものか。ことによると姿をやつしてお供の中に交つてゐるのかもしれない。

ジグネ そして王子さまは。

庶番 塔の中さ。——なぜお前はあの人をにくむのだ。

ジグネ わたしが。わたしにくみなぞしやしない……うそよ、うそよ、うそよ。

庶番 ことにさると……

ジグネ もう何かおいひでない……。

庶番 人間は可愛いと思ふ相手をにくむことがあるものだらう。

ジグネ あゝ、その相手が思ふやうにならないとね……。

庭番　相手が思ふやうにならないとな。だが白鳥姫さまだつて、やはり王子が思ふやうにならないのだ、そのくせ死ぬほど、いや死ぬことは忘れて、戀ひこがれてゞさらつしやるのだ……。

ジグネ　王子さまは死ぬかしら。

庭番　それはお前が知つてゐるはずだ。

ジグネ　いゝえ、とんでもない。でもあの人を死なせてはならないわ……助けて上げてね。

庭番　おれにどうなるものか。

ジグネ　ぬけ道からそつと行つてさ。この牀の上に、お前の知つてゐるぬけ穴があるだらう。……

庭番　奥方は水の底に道を付けなすつたのだ。

ジグネ　おそろしいことだねえ……でも王子さまは助けて上げてよ。早く、助けて上げてよ。それから小舟にのせて海へ出ればいいぢやないか。

庭番　よし、ぢやあ一番罪亡ぼしだと思つてやつて見るか。このまゝ、二度とかへらなかつたら、業が盡きたと思つてくれ……。

ジグネ　無事に行つておいでなさい。

白鳥姫　〔後景から出て來て〕このわる者、お前ここで何をしてゐたの。

庭番　〔跪いて〕わたしはわるいことをしました罪亡ぼしをやつてをりますので……

白鳥姫　どうしてそんなことができよう。お前は不和の種を蒔いた。今頃何を蒔かうといふの。

庭番　〔種を蒔く〕わたしの蒔きますのは、和合、歡喜、平和、萬人に信心をすゝめ、萬人のために零落を防ぐ種ですよ。——お姫さま、どうぞわたくしをお叱り下さいますな、あなた方の御不和にはわたくし何も罪はないのでございます。

白鳥姫　不和だつて。一體お前は青だつたのかい、綠だつたのかい。

庭番　へい〳〵。今あなたの美しい二つのお目でちよつとごらん下さい……

白鳥姫　見てゐますよ。

庭番　〔そばへよる〕ではこの通りわたくしが、片身青く、片身綠色なところをごらん下さい。

白鳥姫　ぢやあ兩方なのね。このいたづらぢゞい、わたしにいいことををしへてくれてね。ありがたう。——でもお前これからどこへ行くの。

庭番　王子さまを連れ出しにまゐります。

白鳥姫　お前が。惡人が善人になれるものかしら。

庭番　いつもさうとはきまりません。——とにかく、差當りぬけ道から行つてまゐります。あの方をおつれ申してかへるか——そのまゝかへれもせず——あの方も連れ出せずにしまふか。

白鳥姫　まあ無事に行つておいで。

廊番　〔脇いぬけ穴を下りて行く〕

白鳥姫　〔ジグネに〕お前、自分のおとうさんに裏切をしたの。

ジグネ　いゝえ。そんなことはございません。

白鳥姫　でも王子さまには裏切をしたのね。

ジグネ　そんなことはございません。

白鳥姫　ぢやあわたしにね。

ジグネ　〔默つてゐる〕

白鳥姫　ぢやあわたしにね。

ジグネ　お姫さま。災難はわれ〳〵一統の上にかかつてをります。たゞ一人の方がこれを救つて下さるのです。それは公爵さまです、あなたのおとうさまです。

白鳥姫　さうだ、公爵さまですよ、あのえらいおとうさまですよ。でもお前がわたしに裏切をして、公爵夫人に角笛をわたしてしまつたために、わたし達にどう難儀がおこつても、それをおとうさまにお聞かせすることはできないのだよ。

ジグネ　角笛のかくし場を御存じですか。

白鳥姫　考へて見ませうよ。〔考へる〕

ジグネ　どこです。

白鳥姫　靜かにおし。……わかつた……鏡のうらだ、あの人の……あの人の白銀の間にある。

ジグネ　ぢやあ行つてとつてまゐりませう。

白鳥姫　お前が。わたしのために。

ジグネ　お禮には及びません。われ〳〵一統の災難でございます。

白鳥姫　お前わたし達を裏切りはしまいね。

ジグネ　わたし達をですつて、どんな人だつて、この人だつて、あの人だつて、わたしが自分で知つてしてゐる限りはけつしてそんなことはないのです。みんなにくむ人を好いてゐる、いつもそんなことはありません。それとは反對にみんなの好まない人をにくむ、そんなこともないのです。わたしの心は二つに割れてゐます。さあ身方の角笛をさがしませう、わたしは身方につくこともあり、つかないこともある。まあつかないでせうよ。〔出て行く〕

白鳥姫　謎を出してといてゐるのね。——エルザや、トッファや、おいで。

エルザとトッファ　〔入り來る〕

白鳥姫　こちらへ。もつとそばへおいで。わたし達の立聽をするものがある。エルザや、トッファや、わたしのそばにゐておくれ。何だかしらないけれど、わたしこはいのだからね。誰とも知らないが、誰かやつてくるのだよ。危險のくることはわたしの心臟の時計でもきこえるし、胸を見てもわかるのだよ。水のやうに冷たい息がかゝる、赤い手がわたしのやはらかな胸にさはる、荒鷹に鳩の雛がつかまれたやうな心持なのだよ——あゝ、胸がわるい。野獣の肉だ、キャベツに百合葱だ、みんなつんと臭いものばかり、ばらもんじんに、いぬごまに……さあ、あの方のおいでだ。——若い王様の。

若い王　〔後景から出て來る。情慾にかゞやく目、ほろ醉〕白鳥姫、エルザ及びトッファは一かたまりになり、白鳥姫をうしろにかこふ〕

王　〔三人を圖々しくしらべるやうに見て〕三人だな。——わたしは誰だか知つてゐるかね。

エルザ　大酒飲の騎士さま。

王　よう慳貪姫。おいで、接吻してやらう。——君はちびで、別嬪で、いぢ悪だからな。〔トッファに〕君は器量はわるいが實意があるな。白鳥姫さまはどこにおいでだ、をしへておくれ。

エルザ　あててごらんなさい。

王　君かな。——さうな……いや、赤い手をしてゐるな。——お姫さまぢやあないぞ。——わたしの名は何といふか、御存じかい。

エルザ　助べい御前。

王　どうもこのいけず娘が氣に入つたな、ちびッ子の山羊娘、抱かれないか。

エルザ　もう早速。

王　お姫さまさへ承知ならな。

トッファ　お姫さまはそんなことをお耳にはお入れになりません、あの方はほんの一つの耳で、夜啼鶯の歌と、菩提樹の音樂と、波の上を吹く風の音をお聞きになるだけです。

王　これ〳〵お多福、さうのべつに長ッたらしく、いろ〳〵並べ立てなさんな……この女ども、もういい加減にして、姫さんの居所をいふがいい。さもないと地獄の惡魔にかけて、繼母御前の鋼の笞が貴様らの背中に火の雨と降るぞよ。白鳥姫はどこにゐる。

白鳥姫　ここに居ります。

王　〔姫をよく見る〕この女か。〔間〕どうもわからないな。繪すがたでは見てゐるのだが、それは美しかつた、だがあれは不忠者の王子めがわたしの御機嫌取りにかいたものにちがひない。——君にはまるで鼻といふものがないよ、目の上にもひつ釣りがあるし、脣は厚すぎる……もう一度

たづねよう、君は白鳥姫ですか。

白鳥姫　わたくしです。

王　〔坐る〕　するとやはり……これだけか。——舞踏はやれるかい。音楽はどうだね。〔間〕　皆無かな……よし皆無ときまれば、その報償におれはこの城を攻めて、火をつけて掠めて、一戰爭おこしてやることにする。〔間〕　お前さん、せめて話ぐらゐできさうなものだな。長い宵一夜語りあかす位出來さうなものだな。——それもだめか。

白鳥姫　〔沈んだ聲で〕　わたくしお話はいたしますけれど、あなたとではごめんを蒙ります。

王　煙突掃除のやうな口の利き方をするな……お前さん聾だな。

白鳥姫　わたくしの耳にどうしてもきこえない聲がございます。

王　その上盲目で跛なのだ。〔間〕正直にいへば、勞多くして功これに伴なはずといふところだ。——〔間〕　まあ、ごきげんよう。いや、わたしの方でお暇をするか……どれ、不忠者の王子を相手に一論判するとしようか。〔立ち上がる〕　ではわたしから。〔出て行く〕

白鳥姫、エルザ及びトッファ兩手をあげてそのまゝ立ち止まつてゐる。

竪琴の音。

王子　〔祕密のぬけ道を上がつてくる〕

白鳥姫　〔いそいで王子の胸にすがる〕

竪琴の音。エルザとトッファは後景から出て行く。

王子　〔物をいはうとするがいへない〕

白鳥姫　〔これも同じこと〕

この時王、そつと窺ひよつて、立聽する樣子で衣の間にあらはれる。

白鳥姫　これがお別れなの。

王子　そんな言葉をつかつてはいけない。

白鳥姫　あの人がここにゐますわ、ゐましたわ、王さまが。あなたの王さまがね。

王子　ではおわかれだ、永久にね。

白鳥姫　いゝえ、あの人わたしの顏を見ないの、聲も聞かないの。體にもさはらないの……

王子　でもあの人はわたしの命を取らうとしてゐる……。

白鳥姫　みんなが命をとらうとしてゐるわ……これからどこへ行くの。

王子　濱の方へ……

白鳥姫　海へ、嵐とはげしい波の中へ、ほんたうに行くの……

王子　わたしは海の水で御婚禮の盃をあげよう……

白鳥姫　そんならわたしも死ぬわ。

王子　さうすればわたし達はまた出會はう、こんどは決して、決して別れることのないやうに。

白鳥姫　えゝ、決してね。でもそれがならなかつたら、わたしお墓の中から見送るわ。……

王子　お前の澄んだ目から流れる涙の一滴一滴は、血になつてわたしの柩に溢れるだらう。けれどこの地の上で心から樂しくくらしてくれるなら、いつでもわたしの柩の中も薔薇の花で一杯になるだらう。

白鳥姫　くらくなつたわ。

王子　わたしは光の中を歩いてゐる、お前の光の中を歩いてゐる。わたしは愛してゐるのだから……

白鳥姫　わたしの魂をとつて下さい、わたしの命をとつて下さい。

王子　それはもう貰つてある。わたしの魂をとつておくれ、わたしの命をとつておくれ。——それはもう上げたよ——これでわたしの體は出て行つても、わたしの魂はのこるのだ……

白鳥姫　わたしの體はここにのこつてゐる、けれどわたしの魂は一しよに——出て行くのだわ。

王子　〔物をいはうとするが、たゞ唇だけが動く〕

白鳥姫　〔これも同じいこと〕

王子　〔祕密のぬけ道を下りて行く〕

王はこの光景の始終を見るうち、感情が迫々變化してくると一しよに、白鳥姫を「發見」したといふ感じに襲はれる、それではじめは恥づかしく思ひ、次には驚異と眩惑の感情にひたされる。で、王子が出て行つてしまふと、王はつと前へ出て跪く。

王　白鳥姫、神さまのお手につくり出されたいみじき製作よ、こはがることはない、今はわたしもあなたといふ人を見て知つたのだ。いと完きものよ、今わたしは銀の絃を鳴らすやうなあなたの聲を聞いた。しかしわたしはあの王子の口で見、あの王子の耳で聞いてゐたので、わたし自らはあなたの愛を求め得ず、あなたを自分のものにすることができなかつた。わたしはあなたの死んだ目付だけを見た、あなたはわたしを見てくれないし、わたしの言葉を聞いてくれなかつた。あなたはあの王子一人のものになつた、よし、わたしがあなたを手に入れても、それは死を腕に抱くといふだけだ。わたしの犯した罪をゆるして下さい。わたしのここに來たことを忘れて下さい。わたしがかりにも不淨な心持であなたを冒さうとしたことを思ひ出さないで下さい。あなたにまつはる思ひ出だけがいつまでもわたしの心からはなれないで、わたしを責めるにちがひない。しかしおわかれに一聲きかして下さい、そのこだまをいつまでもわたしは胸に祕めて置きたい……

一言でいい。どんなことでもいい、響きのある言葉をたゞ一言。〔間〕

白鳥姫　〔邪見に〕行つておしまひ。

王　〔とび上がる〕鳥め。よしおれも答へよう。やれ〳〵ね。〔剣をぬく〕さあかうなれば誰にもお前はやらん、おれ一人のものにする。その代りおれは鳥を手に入れるのだ、おれはしたゝか者か、強情者か、駿馬が好きだ。鳩などはおれの飼ふ鳥ではないのだ。

白鳥姫　〔戸のうしろに退く〕おとうさま、助けて下さい、わたしのそばにゐて下さい。來てよ、來てよ、來てよ。

王　〔よわ〳〵となつて〕あれだ。銀の紋が、父なる天使の日によせる祈の鐘が。これでわたしの力も盡きた……

白鳥姫　〔半ば獣ふやうに〕來てよ、來てよ、來てよ。

王　何といふかはいらしい、整だらう、剣も泣いて、恥づかしがらう、さあ、出て行け、かくれてしまへ。〔剣を鞘に收める〕剣ではだめだぞ。火だ、城に火をつけるのだ、王を欺いたものを殺すのだ……誰だ、そこへ來たのは。

トッファ　〔角笛をもつて來る〕これです。これです。

白鳥姫　お前かい。ジグネではないの。

トッファ　ジグネの手からとつてまゐりました。いつもながらの不實者でございます。

白鳥姫　〔角笛を吹く〕

遠方に角笛にこたへるものがある。

王　〔立ち上がり恐怖につかれたやうに〕鞍につけ。手綱をしぼれ。拍車を踏め。駈足。後景をぬけて、左手へ逃げ出して行く。

白鳥姫　〔また吹く〕

外で角笛が一聲これに答へる。

トッファ　いらつしやいますわ。殿さまがお見ましく。いらつしやいますわ。〔間〕

白鳥姫　〔また吹く〕

《イギリス語譯本には、第三幕初よりここまで脱落、その代りに次の數行が挿入せられて前後をつないでゐる。——譯者。》

庭番　〔車の背後から現れる。片手に案を持ち、片手に公爵の角笛を持つ〕悲になやむものをおゆるしなされませ。悲しむものに慰めを、苦しむものに望みをお授けなされませ。

白鳥姫　おとうさまの角笛だわ。援けが來たんだよ。だけれどこの人は――。

庭番　王子さまはわたしに隨いておいでなされまし。ここの牀の下に海岸へ出る抜け道がございます。さあ、おいでなさいまし。

〔庭番と王子は出て行く〕

〔白鳥姫一人殘る。角笛をふく。遠方にて返事の合圖がきこえる。牢番、釘を植ゑた桶を携へて入りくる。白鳥姫再び角笛を吹く。返事近よりくる〕

公爵、登場。公爵と白鳥姫。

公爵　可愛い娘、誰がどうしたと言ふのだ。

白鳥姫　おとうさま、この釘の出てゐる桶をごらんなさい。この中へあなたの娘を入れようと言ふのよ。

公爵　お前はどういふ過失をしたのだ。

白鳥姫　たゞ／＼戀がをしへてくれた道を辿つて、わたし、王子さまの名を見つけたのよ。あの人の名を書いたのよ。――それから戀したのよ。

公爵　そんなことで命とかへがけにはならぬ。それからどうしたのだ。

白鳥姫　その人の側へ睡たのよ。劍を置いて……

公爵　考へるまでもなく、そんなことはお前の命には及ばないことだ。それからどうした。

白鳥姫　それからどうもしないの。

公爵　〔牢番に〕　この桶を外へ出してしまへ。――さて娘、王子はどこへ行つたな。

白鳥姫　小舟に帆をかけて、家路へ向つたのよ。

公爵　この大風の最中にか。たつた一人でか。

白鳥姫　たつた一人よ。あの人の身に何か起りはしないかしら。

公爵　それは神様のお手にあることだ。

白鳥姫　あぶないことが近よりはしないかしら。

公爵　勇氣のあるものは運にも強いものだ。……

白鳥姫　どうぞ運に勝てますやうに。

公爵　罪の汚れさへなくば、必ず運に勝つことができる。

白鳥姫　あの人はさうですとも。これはわたしよりはよつぽど潔いのよ。

繼母入りくる。

繼母　あなたはどうしてここへおいでなすつたの。

公爵　近道から來たのだ。わしはもつと早く來たかつたのだ。

織母　あなたがも少し早く來てくだされば、娘の身にこんな情ないことが起りはしませんのに。

公爵　何が情ないことだ。

織母　何がつて、取り返しのつかないことなのですよ。

公爵　そのことに就いて證據があるのか。

織母　立派な證據があります。

公爵　用人を呼べ。

織母　用人は何も知つてはをりません。

公爵　〔劍をふり動かす〕家老を呼べ。

織母戰く。四度手を叩く。

用人入りくる。

公爵　お前は早速鹿の搗肉をこしらへておけ、葱と芹と茴香と甘藍で味をつけるのだ。

用人、織母の樣子を窺ふ。

公爵　何を眺めてゐるのだ。——早く用意をいたしておけ。

用人、去る。

公爵　〔織母に〕庭番を呼べ。

織母　庭番は何も知つてをりません。

公爵　何も知つてゐなくとも好い。用があるから呼べといふのだ。——呼べ。

織母、四度手を叩く。

庭番入りくる。

公爵　百合の花を三つとつて來い。白と赤と青とだ。〔庭番、織母を一瞥する〕貴樣の首に氣をつけろよ。

庭番去る。

公爵　それから證人を喚べ。

織母、一度手を叩く。

ジゲネ入り來る。

公爵　證據をはつきりと擧げてみろ。——お前は何を見たのだ。

ジグネ　わたくしは白鳥姫さまが、王子さまと一緒の寢床においでの所をお見かけ申しました。

公爵　劍が置いてあつたか。

ジグネ　置いてはございませんでした。

白鳥姫　ジグネや、ジグネや、わたしはお前の頭に鍬のしもとの當るところを助けてあげたことも あるのに、お前は却つてわたしに反いて僞りの證人に立つのだね。……お前の心をわたしはどん なに情なく思ふだらう、どんなに情なく思ふだらう、かうしてお前はあの夜のことでわたしを裏 切るのだね……なぜお前はそんなことをするのでせうね。

ジグネ　わたくしは何をいたしましたか存じません。わたくしは自分で思はないことをいたすので すね。わたくしは誰か他人の意志をそのまゝ行つてゐるのですよ。この後もうわたくしは生きて ゐたくはありません。救ひ主さまのために、わたくしをお許し下さいまし……。

白鳥姫　わたしそれは許しますとも。いづれ何かの惡い意志に憑かれてしたのなら、お前には罪は ないのだからね。

ジグネ　でも先へわたくしをお罰し下さいまし。

白鳥姫　その通り悔悟してゐる、それでお前の罰は十分ではないか。

公爵　貴樣の言葉は信じられぬ。ほかの證人はゐるか。

二人の騎士入りくる。

公爵　お前たちは花嫁の騎士か。——證據をあげてみろ。

一の騎士　わたくしがマグダレーナさまを寢床へお案内いたしました。

二の騎士　わたくしがマグダレーナさまを寢床へお案内いたしました。

公爵　何だと。すると巧みのわなが跳ね反つたのだな。——ほかの證人はゐないか。

エルザ入りくる。

公爵　證據をあげろ。

エルザ　神樣に誓つて申します、わたくしは罪人におなり遊ばした白鳥姫さまと王子さまが、ちや んと着物をお召しになつたまゝの所を見ました、お二人の間には劍が置いてございました。

公爵　一人は右と言ひ、一人は左と言ふ。又二人は的に外れた返答をいたした。わしはこれを神樣 の判斷にお任せする。——花占ひをするのだ。

トップファ：〔入りくる時〕殿樣に申し上げます。

公爵　お前は何を知つてゐるのだ。

トッファ　姫君は無實の罪でございます。

公爵　おゝ、お前はそれを知つてゐるか。わしたちに敎へてくれ。

トッファ　わたくしはほんたうのことを申してをります。……

公爵　それだけでは誰も信じはしまいぞ。ジグネがそれは僞言だといへば、それを却つて信じなければならなくなるのだ。娘は自分で何と言つたか。あの潔い額、澄んだ瞳、罪のないその口は、何者かが娘を陷れたのだとは言はなかつたか。父の目にだけさう見えるのか。神樣の審判を俟つより外に爲方はあるまい。

庭番、百合の花を入れた盤を持つて登場。公爵、卓の上に百合花を半圓形におく。用人、湯氣の立つ揚肉を盛つた大皿を持つて登場。公爵、花にて皿を圍むやうに揚肉をおく。

公爵　白い百合花は誰だ。

皆々　〔姫と纖母とを除く〕姫君でございます。

公爵　紅い百合花は誰だ。

皆々　〔姫と纖母とを除く〕王子でございます。

公爵　靑いのは誰だ。

皆々　〔姫と纖母とを除く〕若い王樣でございます。

公爵　トッファや、お前は罪の汚れのない女だから、姫の無罪を信じてゐるのだ。これから神樣の審判をわし共に告げてくれ。花の不思議な祕密を知らせてくれ。何が見える。

トッファ　わたくしには惡いことばは申されません。

公爵　それなら善いことばを言つて貰ひたい。――淫蕩な鹿の血の惡氣にかけて、情慾の牧場の草いきれにかけて、何の象が現れたぞ。

トッファ　〔三つの百合花を注視する。花は彼女の言葉の如く動く〕白い百合の花は汚らはしい誘惑を避けて、花を閉ぢました。白鳥姫さまでございます。

皆々　白鳥姫さまは罪のない方でございます。

トッファ　紅い百合も花を閉ぢました、王子さまでございます。情慾を吸ひ込まうとて、蕊を開いてをります。

公爵　善い占象ぢや。それから何が現れたぞ。

トッファ　紅百合は白百合に、誠ある戀の誓をいたしました。青百合は美みと嫉みに悶えまはつてをります。

公爵　善い占象ぢや。――して何人が白鳥姫を得たぞ。

トッファ　王子さまでございます。あの方の戀ひ慕ふお心根は潔いものでございます。それ故力勁いものでございます。

皆々　〔姫と繼母とを除く〕王子さまは白鳥姫さまをわがものになさるでございませう。

白鳥姫　〔父の腕に走り寄る〕あゝ、おとうさま。

公爵　王子を呼びかへせ。角笛を吹け、喇叭を吹け。船を悉く海へ出せ。けれどもその前に、誰を釘箱の中へ坐らせようぞ。

皆々、默す。

公爵　それではおれが言つて聞かせてやる。――公爵夫人。仔言者、魔法使ひ。――見ろ、魔女め。貴様の術も愛を支配することはできないのだ。――出てゆけ、早く出て行け。

繼母、手にて公爵を麻痺させようとするやうな態をする。

公爵　〔左の肩にて姫を擁ひ、劍を拔いて切尖を突きつける〕惡魔め。魔術をもつておれの双尖を鈍らせようとするか。

繼母、豹の歩むやうに、こつそりと後方に退く。

公爵　それから王子を迎へるのだ。

繼母、入口にて化石したやうに立ち、脾臟を吐くやうに忿怒の口を開く。孔雀と鳩と死落ちる。繼母次第に膨れ始める。衣服は膨れ上がる氣球のやうに張開する。忽ち首と軀の上部とを隱す。着物は蛇と枝條の形にて燃えあがる。太陽、次第に沈んでゆく。天井、徐ろに廣間の上に落ちる。煙と焔が燧燈からむく〳〵上がつてくる。

公爵　〔劍の十字架を繼母の方へ差し出す〕救世主のみ名を唱へよ。

皆々　主よ、慈みたまへ。憐みたまへ。

天井おのづから上がる。煙と焔燧燈から消えさる。

外が何となく物騒がしくなる。つぶやく聲々が聞える。

公爵　何事が起つたのだ。

白鳥姫　知つててよ。――見えてよ。あの人の髪の毛から、あんなに雫が滴つてゐる。脈も搏たなくなつた。もう呼吸も聞えなくなつた。あの人は死んでしまつたのだ。

公爵　どこに何が見えると言ふのだ。誰が見えるのだ。

白鳥姫　どこにつて、わたしには見えるのよ。

公爵　わしには何も見えぬ。

白鳥姫　あの人たちがすぐに來たらどうしよう。きつと來るのよ。

四人の少女、白百合と水松の小枝の籃を運んで登場。少女等それを牀に撒く。その跡に四人の少年、さまざまの節にて銀鈴を鳴しながら登場。次に十字架像を携へた助祭。次に王子を横たへた黄金の棺車、紅白の薔薇の花をふりかけた白の經帷子にてその上を掩ふ。王子の髪は再び黒く、顔は若く、薔薇色をなし、かゞやくばかりに美しく、脣に微笑を殘す。

竪琴鳴る。太陽昇る。繼母を包んだ寃法の衣破れて、繼母、再び元の姿を現はす。

棺車は昇りゆく太陽の光のなかに据ゑられる。

白鳥姫、身を投げかけて棺車の側にひざまづき、王子の顔に接吻する。

人々、面を掩ふて泣く。

公爵　そこにゐる漁師、事の顚末を聞かせてくれ……

漁夫　大殿様、かういふ姿になり果てられました。――若い王子さまは一旦彼方の瀬戸を乘切らうとさつしやいましたが、戀の心狂はしくまた引つ返さうとお焦りになりました。もう一寸も進まない小舟をうち棄てて、大潮と、風と浪とに逆つて、大海を泳ぎ越さうとなされました。

わくたしは浪の上にこの方の頭を見ました。姫君の名を呼ぶ聲を聞きました。やがて――彼方の白い砂濱にその死骸がしづかにうちあげられたのでございます。

青い塔の中の一夜のうちに、この方の髪は灰色になりました。悲しみと歎きに頬は痩せおちました。土け色の脣には微笑の影さへ見えなかつたのでございます。

今また、死骸になられて若さと美しさがありました。栗色の額髪は紅の頬を飾つてをりました。――死骸は笑つてをりました――どらんなされませ、今もまだ笑つてをられます。人々はそこの濱邊につどひ寄つて、うつとりと、『さあ、これも戀のため』と囁きあひました。……

白鳥姫　〔王子の死骸の側に横伏して〕この人は死んでしまつたのよ。この人の心はもう歌はない。この人の目はもうわたしの命を照らさない。この人の息の露も、もうわたしにはかからない。この人は笑つてゐるのね。だけど、わたしに笑つてくれるのではない、天の上で笑つてゐるのよ。わたし、この人の行く途を、どこまでも一緒に行かうねえ。

公爵　死人の口を吸ふことはなるまい、死人の口には毒があるのだ。

白鳥姫　それがためにあたしが死ねば、戀の毒にあたつたのよ。死ぬのはわたしにとつて生きることなのだもの。

公爵　死者は心に思つても人に逢へぬといふことを知つてゐるか。この世で人を戀したことが、あ

の世で何の足にならうぞ。

白鳥姫　そんなら愛は、愛の力を越えた彼方までのびることはできないのかしら。

公爵　智者達は幾度もその事を論爭つた。

白鳥姫　おゝ神さま、どうぞあの人を天から返してくださいませ——。

公爵　おろかな祈だ。

白鳥姫　あゝ、あたしには祈ることができない。惡魔の眼が、まだあたしたちを操つてゐる。

公爵　太陽の光に碎け散つた魔女のことを言ふのか。あの女は火刑の薪の上で、間もなく燒き殺されてしまふのだ。

白鳥姫　生きながら燒かれるんですつて。いゝえ、いけなくつてよ。どうぞ、をばさまを恕してあげてくださいな。

公爵　生きながら燔かれてしまふのだ。皆の者、濱邊に火刑の薪を高く積め。あの女を燒いた灰が、さまざまの風に吹き散るやうにするのだ。

白鳥姫　〔公爵の前に跪く。〕いゝえ、どうぞおとうさま。をばさまの罪をゆるしてくださいまし。

繼母　〔妻がかはつて入つてくる。寛性を脫して〕恕しておくれ。わたしのために心からの祈を捧げてくれたのは——。

白鳥姫　わたしよ。おかあさま——あなたの娘よ。

繼母　おゝ、お前は——よくおかあさまと言つておくれだねえ。誰がそれを敎へたのだい。

白鳥姫　愛がそれを敎へてくれたのよ。

繼母　まあ、それほどのあらたかな奇蹟を行つた愛をほめ讃へたい。——まあ、娘や、それではきつと愛がくらい死の國から死人を呼びかへしてくれるでせう。——わたしにはそれが出來ない、愛といふものはわたしには拒まれてゐるのだからね。でもお前なら、お前なら。

白鳥姫　まあ、わたしのやうなものに何ができるでせう。

繼母　お前は人を愛することができる、人を許すことができる。——まあ、それではどんなことでもできるといふものです、子供ながらお前には全能力がある。——もうなんにも力のないものになつたわたしだけれど、この敎訓は用ひておくれ。さあ、お前の戀しい人の名をお呼び、そしてお前の手をあの人の胸にのせるのだよ。すると神さまのお力で、それ　もう神さまのお力一つで——お前の聲が戀人の耳にきこえるでせう——お前に信心がありさへすればね。

白鳥姫　わたし信じますわ、やつて見ますわ。願つて見ますわ　〔王子い棺のそばへ行く。片手をその心臓にかけ、片手を天に向つてさしのべる。それから俯伏しになつて、王子の耳に三度までくり返して何事か

さゝやく。三度めに王子は目をさます。白鳥姫その胸にすがりつく。皆々感謝し、讃美するやうに踊りながめる。音樂〕

ダマスクスへ　細目

第一部

一　街の角……六
二　醫師の家……三
三　宿屋の一間……四八
四　海べ……五四
五　街道……六四
六　谷合の路……六六
七　厨……六九
八　薔薇色の部屋……八一
九　救護所……九二
一〇　薔薇色の部屋……一〇三
一一　厨……一一〇

一二 谷合の路……一一八
一三 街道……一一九
一四 海べ……一二三
一五 宿屋の一間……一二三
一六 醫師の家……一二七
一七 街の角……一三三

第二部

第一幕 家の前……一四八
第二幕 實驗室……一七六
薔薇色の部屋……一九一
第三幕 酒場での宴會……一九五

牢屋……二一〇
薔薇色の部屋……二一六
第四幕 酒場……二三三
谷合の路……二三七
薔薇色の部屋……二四二

第三部

第一幕 河の岸……二五六
第二幕 山中の十字路……二八八
第三幕 修道院山の高臺……三一〇
修道院山の岩石地……三二五

第四幕（ある小家……三四三
修道院の（會議室……三七一
畫廊……八三
禮拜堂……三九
小註

夢の戲曲細目

前戲……四〇六
第一幕
城の前……四一二
オペラの前……四二三
辯護士の家……四三〇
會堂で……四四一
第二幕
辯護士の家……四四七
汚辱の濱……四六八
光明の港……四六七
第三幕
地中海の海べ……四八八
フィンガの洞穴……四九四
オペラの前……五一一
城の前……五二四

白鳥姫細目

第一幕……五四〇

第二幕……
第三幕……

大正十二年十月廿七日印刷
大正十二年十一月七日發行

定價參圓五拾錢

飜譯者　楠山正雄

發行者　東京市牛込區矢來町三番地　佐藤義亮

發行所　東京市牛込區矢來町三番地　新潮社
電話牛込（園）八八八八〇〇〇〇　六番　七番　八番　九番

振替（東京）一七四二番

印刷所　東京市小石川區西江戸川町　電話小石川五九二番　富士印刷株式會社
印刷者　佐々木俊一

振替は當分
ヘスクスマダ

『ストリンドベルク戯曲全集』内容

讀者聯讀の便をはかり、「戯曲全集」と「小説全集」との二に分つて發行す。

第一卷　史劇とロマンチック劇　マイステル・オラーフ——組合の祕密　マルギット夫人——幸福なペールの旅

第二卷　自然主義劇と一幕物　父——なかま——一幕物（十一篇）

第三卷　ダマスクスへ　外二篇　ダマスクスへ——夢の戯曲——白鳥姫

第四卷　死の舞踏　外二篇　死の舞踏——罪と罪——ヘムゼーの人々

第五卷　祝祭劇と童話劇　復活祭——降臨祭——仲夏祭——天國の鍵——花嫁の冠

第六卷　小劇場曲と韻文劇　稲妻——燒跡——幽靈曲——ペリカン——アブ・カセムの上靴——クリスマスおめでたう——國道モーゼ——ソクラテス——クリスト

第七卷　世界史劇三部作

近刊□自然主義劇と一幕物　楠山正雄氏譯

『ストリンドベルク小説全集』内容

第一卷■女中の子　福田久道譯

「女中の子」は次の「或る魂の發展」と共に、ストリンドベルクの魂の發展史を形造る、彼の幼少年時代より青年時代（二十時代）に至るまでの自叙傳である。如何に彼は、求め、迷ひ、疑ひ、誤解され、迫害され、輕蔑され、蹂躙され、怒り、失望し、歎き、泣き、悲んだか。而も尙、如何にそれは愛さんとし、求めることを罷めなかつたか。その魂は、虛僞、欺瞞、術策、墮劣、不正、醜惡、邪惡等、あらゆる地獄のものを憎み、そしてその反對の、あらゆる天國のものを求める。——一八四〇年代から七〇年代に至るまでの、瑞典に於ける幼き一つの魂の、かゝる戰ひの跡を描けるものが本篇で、實に眞劍な、死物狂ひな、火花を散らす戰の記錄である。從つて階級爭鬪、兩性の爭鬪、新舊思想の葛藤等、凡そ劍を交へずにはゐられない、あらゆる必然な爭鬪、（若しくは爭鬪性）が含まれてゐる。果してこれを小説といふべきか。一面に於ては當時の社會、經濟、勞働問題等の歷史とも見られ、それに對する評論とも見られる。要するにそれらの中に育つた一つの魂の發展が、それらを背景として描かれた一つの歷史である。此の世に無くてはならぬ書物である。

四六判紙數六百頁、總布製。定價參圓五拾錢、送料拾貳錢。

續刊　第二卷　或る魂の發展　第四卷　地獄、傳説

第三卷　痴人の告白　第五卷　離別、孤獨

第六卷以下は、『赤い部屋』『島の農夫』等の長編小説を收める。

□飜譯書類□

ロマンロオラン	ジャン・クリストフ	豊島與志雄譯	全四册	一册貳圓五拾錢 送料一册拾貳錢
トルストイ	戰爭と平和	昇曙夢 米川正夫譯	全四册	一册貳圓五拾錢 送料一册拾貳錢
同	アンナ・カレニナ	原久一郎譯	全三册	一册貳圓參拾錢 送料一册拾貳錢
ドストエフスキイ	カラマゾフの兄弟	米川正夫譯	全三册	一册壹圓八拾錢 送料一册拾貳錢
同	罪と罰	中村白葉譯	全二册	一册壹圓八拾錢 送料一册拾貳錢
ユーゴー	レ・ミゼラブル	豊島與志雄譯	全四册	一册貳圓 送料一册拾貳錢
ルッソオ	懺悔録	生田長江 大杉榮譯	全二册	一册壹圓五拾錢 送料一册拾錢
ダンヌンツイオ	死の勝利	生田長江譯		定價壹圓五拾錢 送料拾錢
ゾラ	ナナ	宇高伸一譯		定價貳圓五拾錢 送料拾貳錢
ショウ	ショウ一幕物全集	市川又彦譯		定價貳圓五拾錢 送料拾貳錢
シング	シング戲曲全集	松村みね子譯		定價貳圓 送料拾貳錢

505
65

終